

調査名	分 析	実施結果（正答率）	
区 学 力 調 査 全 学 年	【国語】全体的に区平均を上回っている領域が多いが、やや学年によって差が見られる。漢字の読み書きや文法・語句と言葉に関する内容についての知識を問う問題の正答率が低い傾向がある。 【社会】4つのすべての観点に対して、区の正答率をおよそ3～7％上回っている学年もある。「日本の諸地域」の正答率が70.4％と高く、「身近な地域の調査」が40.7％と最も低い。アンバランスが課題である。 【数学】4つのすべての観点に対して、およそ区の正答率を上回り、目標値も上回っているものが多かった。領域においては、「数と式」が高く、「関数」が低い傾向がどの学年にも見られた。 【理科】全学年、正答率は区を上回っているものの、学年、項目によっては定着率に差が見られる。化学式などの知識をしっかりと定着させることが必要である。 【英語】領域別では他の領域に比べて「聞くこと」の正解率が10％ほど高く、観点別では「理解の能力」の正答率が高い。学年により語彙の知識・理解の定着が不足している部分も見られる。	区	自 校
		【1年生】	【1年生】
		国語 ⇒66.4	国語 ⇒71.7
		社会 ⇒60.6	社会 ⇒64.1
		数学 ⇒67.6	数学 ⇒73.2
		理科 ⇒56.5	理科 ⇒63.1
		英語 ⇒61.6	英語 ⇒68.7
		【2年生】	【2年生】
		国語 ⇒61.3	国語 ⇒62.2
		社会 ⇒49.8	社会 ⇒51.3
		数学 ⇒55.6	数学 ⇒63.9
		理科 ⇒47.8	理科 ⇒50.9
		英語 ⇒56.8	英語 ⇒59.5
		【3年生】	【3年生】
		国語 ⇒68.2	国語 ⇒72.7
社会 ⇒50.3	社会 ⇒56.5		
数学 ⇒60.5	数学 ⇒71.4		
理科 ⇒51.6	理科 ⇒64.2		
英語 ⇒66.6	英語 ⇒75.0		
都 学 力 調 査 中 2	全教科、2年生の結果と都の正答率と比べると全体的に上回っていることはわかる。しかし、英語のように読み解く力や「解決する力」が低い傾向があり今後の課題となっている。社会科では、「読み解く力に関する内容」の観点別をみると、「取り出す力」「読み取る力」では約3ポイント上回るものの、「解決する力」では、約3ポイント下回った。数学では、「教科の内容」においての観点別正答率では、「思考・判断・表現」「知識・理解」では都平均よりも上回ったが、「関心・意欲・態度」「技能」では都平均よりも下回った。「解決する力」は、やや低い傾向にある。	都	自 校
		国語A⇒58.4 社会A⇒54.1 数学A⇒58.3 理科A⇒55.2 英語A⇒64.5 国語B⇒30.7 社会B⇒47.1 数学B⇒52.3 理科B⇒35.9 英語B⇒41.7	国語A ⇒59.8 社会A ⇒55.7 数学A ⇒59.9 理科A ⇒56.7 英語A ⇒59.8 国語B ⇒37.0 社会B ⇒49.3 数学B ⇒52.5 理科B ⇒38.8 英語B ⇒39.3
全 国 学 力 調 査 中 3	【国語】伝えたい事柄が読み手に効果的に伝わるよう書くことに課題がある。必要に応じて明確な意図をもって質問することについては身についている状況にある。 【数学】作図の根拠として用いられている図形の条件理解が不十分な部分が見られる。与えられた表や式を用いて数学的に説明する力を伸ばす必要がある。 【理科】実験技能を身に付けさせる必要があるとともに自分の考えを言葉で表現する力を養う必要がある。学んだ知識を実社会の特定の場面で活用できる必要がある。	全 国	自 校
		国語A⇒75.8 国語B⇒65.8 数学A⇒64.4 数学B⇒41.6 理科 ⇒53.0	国語A ⇒80.1 国語B ⇒71.9 数学A ⇒73.4 数学B ⇒54.7 理科 ⇒61.6

<平成 28 年度の具体的方策>**【国語】**

- ・「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の作文や文法、漢字の指導を行う必要がある。そのため、毎時間の授業で簡単な漢字テストや文法テスト等を行い解説していくことで、長期的・継続的な指導を行っていく。
- ・資料を作成してスピーチやプレゼンテーションをする際、資料を提示する意図を明確にし、その効果を考えながら作成するように指導することが大切である。

【社会】

区の平均正答率を上回る結果となった一方で、目標値には到達できなかった観点も多くある。目標値達成のために以下の方策を行う。社会的事象への関心・意欲・態度を高める方策として、電子黒板やタブレット PC などの ICT 機器を活用した授業を行っていく。ICT 機器の活用の具体的な方法としては、複数の資料を提示するなどの視覚化をすることで、興味や理解を高めていく。

また、発表の道具としてタブレット PC にまとめ、それを全体に共有するといった活動を行っていく。さらに、個人の活動としてタブレット PC を活用し調べる活動を行っていくことで、次々に生まれる疑問をすぐに調べ解決できることで、いろいろな社会的事象に興味をもってもらう活動を実践していく。

社会的な思考・判断・表現を高める方策として、ある事象が起こる理由を考え、その考えをワークシートに表現するといった活動などを通して、生徒が主体的に考える場面を意図的に設定する。資料活用の技能を高める取り組みとして、授業やテストなどで資料の読み取りを行う機会を多く設けていく。その際に、個人で解決する場面とグループで解決する場面を設けていくことで、さまざまな難易度の資料読み取りを行っていく。また、複数の資料を用意し、比較するなどの取り組みを通じて、資料活用の技能を高めていく。

社会的事象についての知識・理解を高めるために、小テストを実施していく。実施時期としては単元ごととし、学習の整理を頻繁に行うことで、知識の定着を目指す。これらのほかに、言語活動の充実という視点から、発表活動を取り入れていく。この発表活動は、社会的事象に対して考えをまとめ、まとめたものを発表するものや、グループで話し合いながらまとめたものを発表する活動を行っていく。グループなど多くの人たちで考えを議論しまとめることで、上記の社会科 4 能力の向上に繋がると考える。また、その発表に対する質疑・応答などの時間を充実させることで、言語活動の充実に繋げていきたい。

【数学】

- ・習熟度別学習を実践し、個々の学習状況に応じて指導できる授業形態をとる。
- ・各学年で課題が見られた単元に関して、復習する時間を設ける。
- ・次年度同じような課題結果がでないよう指導計画を考え、その内容の指導方法や内容を確認する。
- ・基礎的・基本的な知識が身に付くよう、各授業内で小テストなど確認する機会を設定し、知識の定着を図る。

【理科】**(1) 実験・観察を中心とした学習を行う**

「仮説実験授業」の考え方を基本に、「予想」「実験・観察」「結果」「考察」の手順に従って「科学的思考力」を高め、「知識」を深める授業を行う。その際、「実験・観察」をより正確に効果的に行うために、ワークシートとしてのプリントを用意し、「結果」を共通の形式で記録させる。「考察」では自由意見を尊重し、柔軟な思考力を育てるように工夫するが、「まとめ」として正しい知識を身に付けさせることも疎かにしない。理科の楽しさ、面白さを感じられるように指導方法を考える。

(2) ICT機器の活用

電子黒板、タブレットPCの活用を進め、生徒の学習意欲を高めるとともに、思考力・発表力を高める。

理科の内容は生活に密着したものも多く、授業内容と関連性のあるトピックスを紹介したり、教科書には載っていない、不思議な生物や現象を紹介したりすることで、生徒の興味・関心を高めることができる。インターネットを常時使用できる環境を利用し、授業の流れの中で生まれた疑問をその場で検索して解決し、話題となった生物や現象の画像をその場で示すことができるので、生徒の知的好奇心を満たし、学習意欲を高める工夫をする。

また、班での思考活動の支援ツールとしてワークシートの代わりにタブレットPCを使用する、発表の際に、タブレットPCで作成した資料を電子黒板に投影する、タブレットPCを用いてレポートやプレゼンを作成するなど、一定の効果をあげているので、このまま継続して行う。

(3) 問題の正答率を高める

問題の意図を理解して解答することに慣れていない生徒が多いので、授業中の小テストや演習の時間を確保するとともに、希望者に対しては補習を行うなどして正答率を高める。いわゆるテストに出る問題には一定のパターンがあるので、効率の良い学習方法としても提示する。多少時間がかかっても「考えて正解できた」という達成感を与えることで学習意欲を高める効果も期待できる。

【英語】

○語彙力の向上に向けてディクテーションや表現文を多く取り入れる。

○読み解く力をつけるために辞書の使用を推奨する。

○教科書以外のある程度まとまった英文を読む機会を取り入れる。また、その英文の内容に対しての問答に解答する力をつけさせる。

○習熟度別学習において、発展コース以外の生徒たちの学習効率の悪さを向上させる工夫をする。特別支援員の先生がたなどに教室に入っただく。